



日本航空123便墜落事故から40年 今、私たちは過去の事故から何を学ぶべきか

どのような事故だったのか？

1985年8月12日に発生した日航機墜落事故(日本航空123便墜落事故)は、日本航空の東京(羽田)発大阪(伊丹)行きボーイング747型機が、群馬県上野村の御巣鷹の尾根に墜落した世界最悪規模の単独機航空事故です。乗員乗客524名のうち520名が死亡し、生存者は4名のみでした。

事故の原因は？

事故の7年前に、尻もち事故で損傷した後部圧力隔壁の修理不良による金属疲労破断で、飛行中に隔壁が破損し、急減圧とともに垂直尾翼と全油圧システムを喪失。操縦不能となり約32分間の飛行の末に墜落しました。そして、その修理不良の原因は、**ボーイング社の修理作業で接続用の金属板(スプライスプレート)の取り付けミスがあり、本来1枚で支えるべき部分が2枚に分割されてしまう構造になっていました。**そのため耐久性が不足し、長年の加圧・減圧の繰り返しで金属疲労が進行。事故当日、巡航中に隔壁が破断し、急減圧と同時に垂直尾翼がほぼ失われ、油圧システムも全損。操縦不能となり、群馬県御巣鷹の尾根に墜落しました。



現在の事故現場



御巣鷹山の
山頂にある慰霊碑



事故の衝撃により
折れた木



周りの尾根の様子

この事故は、わずかな不具合やミス、そして現場の声を見過ごしたことが、取り返しのつかない結果を招くことを示しました。公共交通機関で働く私たちは、安全を最優先にし、**異常や不安を自由に共有できる職場環境を創り、守らなければなりません。**

今の職場はどうでしょうか？管理者による隠ぺいや原因究明のほずが、責任追及になっていませんか？安全とは、規則や設備だけでなく、一人ひとりの声と行動で築くものです。今こそ、JR東労組に結集し、命を守り仲間を守る安全文化を共に考え創り、そして後世に受け継いでいきましょう！